

Title	経済学会シンポジウム：経済学研究のフロンティア：序
Sub Title	Keio Economic Society's symposium : Frontiers of economic research : preface
Author	玉田, 康成(Tamada, Yasunari)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2024
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.117, No.2 (2024. 10) ,p.135 (1)- 138 (4)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	経済学会シンポジウム：経済学研究のフロンティア
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20241001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

経済学会シンポジウム ——経済学研究のフロンティア——

玉田康成*

経済学会シンポジウムは、慶應義塾経済学会員の親睦を目的として 1965 年から実施され、今回で 19 回目となる。慶應義塾経済学会は 70 名を超える会員を誇り、それぞれの会員が日々、研究・教育活動に尽力している。とはいえ、本学経済学部各教員の研究分野は高度に専門化されており、問題へのアプローチ方法も多岐にわたっている。たとえ近接の分野であったとしても、教員間でそれぞれの研究に触れあう機会ほとんどないのが現実である。

経済学会シンポジウムは、多様な分野で活躍する経済学部教員同士が、最新かつ高度な研究成果に触れあうことで、さらに知見を広げ、大いに刺激を受け、互いに相乗効果を生むことを期待して、定期的に実施されている。

経済学会は、経済学部教員の研究が学部学生諸君にとっても新たな知見となるように、このシンポジウムで報告されたうち 3 名の方に、研究を解説する論文を寄稿していただいた。

今回のシンポジウムでは、松田一茂准教授、菅澤翔之助准教授、岡達志教授、佐藤空教授、小橋文子教授、沖本竜義教授、一上響教授による 7 つの報告があった。

シンポジウム第 1 報告、松田一茂准教授による「大学と賃金格差」では、先進国で賃金格差が拡大しており、その背後には、コンピュータが大卒労働者の生産性を高め、逆にロボットは高卒労働者のルーティンワークを代替することによる、大卒者と高卒者のスキルプレミアムの拡大があることが説明された。政策を通じて大卒の数を増やせばスキルプレミアムを減少させることができるが、中退のリスクが大学進学を躊躇させる要因となること、そして、所得が少ない場合は返済額も少なくなる「所得依存型返済学生ローン（Income-contingent student loans, ICL）」の導入により大卒者

* 慶應義塾大学経済学部

数は増加しスキルプレミアムが減少することが説明された。本研究の解説は、「所得依存型返済学生ローンと人的資本」というタイトルで本号に掲載されている。学生諸君の一読を薦める。

第2報告、菅澤翔之助准教授による「時空間データのベイズモデリングとその応用」では、カウントデータ（計数データ）についてのゼロ過剰問題に対応する方法論が説明された。カウントデータは様々な分野のデータ分析課題で登場するが、現実のデータでは多くのゼロカウントが含まれる状況、つまりゼロ過剰データの問題が頻繁に起きる。とくに、時間情報や位置情報が付随した状況ではゼロ過剰データの取り扱いにはさらに難しくなるが、それに対する階層ベイズ的アプローチを用いた時空間モデリングの方法論について解説された。また具体的な分析例として、バーレンツ海におけるシシャモ、ミシガン州におけるカナダツガ、東京都でのアパート価格、のデータを利用して、分析のモチベーションから実際のモデルの適用例について説明された。本研究の解説は、「階層ベイズ法を用いたゼロ過剰カウントデータの時空間モデリング」というタイトルで本号に掲載されている。学生諸君の一読を薦める。

続いて第3報告、岡達志教授による「因果効果の異質性」では、異質な処置効果に対するセミパラメトリックなアプローチの方法論と有効性について説明された。ランダム化比較試験（randomized control trials, RCT）は因果効果を推定するための主要なツールだが、平均処置効果（average treatment effects）のみで評価しても十分ではなく、全体の分布やより効率的な推定、情報のさらなる有効利用に関心が向けられることがある。本報告ではセミパラメトリックな手法である分布間回帰（distribution regression）が異質な処置効果（heterogeneous treatment effects）に有効であることが説明され、そして、応用としてオレゴン州の低所得無保険成人に対する保険提供の効果の分析と、アトランタのコブ郡水道局がおこなった水消費の削減のナッジプログラムの分析が紹介された。RCTの重要性が共有されるなか、その正確な分析のためにはより高度なツールが必要であることがよく理解できる報告であった。

第4報告、佐藤空教授による「鳥々を発見すること——ポーコック史学における「自己」と「他者」」では、英語圏を中心とする近世の政治思想を考察し、「新しいブリテン史」を提唱したJ.G.A. ポーコックについて、とくに「自己」と「他者」の対置がその主題にて一貫して重要であること、そして、先駆的な「シヴィック」な他者概念についての説明がなされた。ニュージーランドを出自とするポーコックは、ブリテンとコモンウェルス諸国に自己と他者という関係性を見だし、その相互関係の重要性を指摘した。本報告ではイギリスにおける伝統的な思想史研究とポーコック自身の思想の変遷とを対比させつつ興味深い議論がなされた。最後に説明された、ポーコックへの批判の紹介は相対化した深い理解を可能とするものであり、ポーコックへの興味がさらに喚起された。

第5報告、小橋文子教授による「国際貿易における技術規制」では、貿易の非関税措置の中でも大きな割合を占める技術規制に焦点をあて、その効果について説明された。技術的基準や認証制度といった国内製品への技術規制は、原則として外国製品にも適用される。小橋氏の研究では、US FDAの輸入拒否データと中国企業の製造業データをマッチングし、米国の輸入拒否が中国企業の輸出活動に与える影響を分析した。そして、過去の輸入拒否の経験は、その企業にとって輸出の継続に対して障害となるが、大企業や技術規制に対応できる企業は、輸出量や輸出価値を増加させる傾向があることを明らかにした。本研究は個別製造業者に焦点をあて、輸入拒絶の直接的影響を初めて分析したものであり、その重要性はとても大きい。

続いて、第6報告、沖本竜義教授による「企業のESG評価と市場評価」では、ESG投資を呼び込むための評価指標であるESG評価と、市場評価との関係について説明された。ESG投資とはEnvironment（環境）、Social（社会）、Governance（企業統治）に対する取り組みを企業への投資判断の基準とするものだが、ESGの取り組み自体が企業業績に直結することは少ない。したがって、企業のESG評価と市場評価の関係を明らかにすることは重要な研究課題である。本報告では沖本氏の3つの研究成果を中心に議論がなされ、とくに、企業の高いESG評価は高い市場評価につながる傾向があること、それは企業の特性やセクターに依存すること、そして、日本の株式市場では女性活躍に関連するESG項目の評価が高く、今後は気候変動といった項目が評価されるであろうことが説明された。本研究の解説は、「企業のESG評価と市場評価」というタイトルで本号に掲載されている。学生諸君の一読を薦める。

最後に、第7報告、一上響教授による「日銀による資産買入れの影響」では、日本銀行による上場投資信託（ETF）買入れの影響について説明された。2010年の包括的金融緩和政策とともに日銀のETF買入れが開始された。これまで、非伝統的金融政策の研究ではイベントスタディが利用されてきたが、それはETF買入れの効果を検証するうえでは適切ではない。一上氏は日銀がルールに基づいてETF買入れをおこなっていたことを利用して個別株の買入れ額を推計した。そして、日銀のETF買入れの株価への効果はかなり大きいことを明らかにした。現在、ETFの扱いについての検討が示唆され、今後について様々な意見がかわされているなか、正確な学術研究の価値は大きい。

以上、7つの報告が半日をかけておこなわれ、報告者を含む20名の参加者が個々の専門分野を超えて活発な議論をかわした。そしてそれぞれの研究の重要性を確認するとともに、自身の研究を進めるうえで大いに刺激を受けたであろうことから、テーマにふさわしいシンポジウムになったといえる。

本号では3報告について分かりやすく解説された論文が掲載されている。学生諸君も最新の研究

に触れるべく、是非とも一読して欲しい。

経済学会は、シンポジウムを始めとして今後も活発な学会活動を企画していく。こうしたシンポジウムが経済学会会員間の、そして、なにより学生諸君からの知的関心をさらに引き出し、学知を広げる一助となることを強く期待している。

テーマ：経済学研究のフロンティア

プログラム：

2023 年 11 月 23 日（木）11：00～17：00

11:00 松田一茂 「大学と賃金格差」

11:40 菅澤翔之助 「時空間データのベイズモデリングとその応用」

13:00 岡 達志 「因果効果の異質性」

13:40 佐藤 空 「島々を発見するということ——ポーコック史学における「自己」と「他者」

14:40 小橋文子 「国際貿易における技術規制」

15:20 沖本竜義 「企業の ESG 評価と市場評価」

16:00 一上 響 「日銀による資産買入れの影響」

会場：慶應義塾大学三田キャンパス・東館 6 階 G-Lab

参加者（50 音順，敬称略）：

一上 響（経済学部教授）

千賀達朗（経済学部准教授）

岡 達志（経済学部教授）

玉田康成（経済学部教授）

沖本竜義（経済学部教授）

津曲正俊（経済学部教授）

小橋文子（経済学部教授）

土居丈朗（経済学部教授）

加島 潤（経済学部教授）

直井道生（経済学部教授）

河端瑞貴（経済学部教授）

中妻照雄（経済学部教授）

坂井豊貴（経済学部教授）

藤原グレーヴァ香子（経済学部教授）

佐藤 空（経済学部教授）

穂刈 享（経済学部教授）

白塚重典（経済学部教授）

松田一茂（経済学部准教授）

菅澤翔之助（経済学部准教授）

山田篤裕（経済学部教授）

以上 20 人